

Don't Jump, Mr. Boland!

1954

by Norman Berrow

目次

消えたボランド氏

5

訳者あとがき 324

解説 横井 司 327

主要登場人物

- J・モンタギュー・ベルモア……………ラジオドラマのベテラン俳優
ウイロビー・デル……………シドニー在住の会社社長
アンジェラ・デル……………ウイロビーの娘
サム・スターリング……………ウイロビーの甥
ストーナー……………ウイロビーの使用人
キャリー・ボランド……………ウイロビーの別荘の隣人
エディ・スタツカー……………小悪党
クエリータ・トールズ……………エディのガールフレンド
ジニーアス……………シドニーで暗躍する謎の男
ボロツプ夫妻……………ウイロビーの取引相手
バーサ・バツグ……………ヤルীগアの住人
ロナルド・ゴールディング……………バーサの甥
バート・グラブ……………ナラビーンに住人
アルトヴァイラー・クレシツク……………ウイロビーと同じアパートメントの住人
ミセス・ベネット……………クエリータと同じアパートメントの住人
リチャード・エサリツジ……………オーストラリア警察犯罪捜査局の刑事
ウイリアム・ウエツソン……………オーストラリア警察犯罪捜査局の巡査部長
タイソン……………オーストラリア警察犯罪捜査局の警部

消えたボラント氏

第一章

四方からの通りが坂の上で合流するキングス・クロス交差点のすぐ手前、ウイリアム・ストリートの最後の停留所で路面電車を降りたのは、誰かに追われているような表情の男だった。上り坂の中央を走る電車から飛び降りると、そのまま舗道へと駆けて行く。

瘦せた顔はフレットに似ており、細い髪は砂色で、ほとんど肌が透けて見えるほどうすすらと口髭を生やしている。青いスーツ、黒いスナップブルムのフェルト帽子、それに爪先の四角い黒い靴と、いいでたちだ。白いシャツには、なんとも芸術的な真つ青のシルクのネクタイを締めている。男の名はエディ・スタツカー。その夜恋人のクエリータとデートをして来たエディにとって、このキングス・クロスはまさしく危険地帯としか思えなかった。なぜならキングス・クロスは、ジョーニアス天才と呼ばれる男の縄張りであり、エディはジョーニアスの情報を警察に密告したからだ。

脇道に飛び込む。この先を行けばクロスの少し先でヴィクトリア・ストリートに出られるはずだと、あれこれ考えを巡らせる。だがエディは二つの点で大きなまちがいを犯していた。一つめに、クエリータは彼の恋人ではない。実はジョーニアスの女で、彼に言われてエディを探っていたのだ。そして二つめには、エディにとってその夜、キングス・クロスはまったくの安全地帯だった。すべてのトラブルに終止符を打つ最後のトラブルに遭遇するのは、翌日の夜なのだ。

クエリータはエディが密告したと知って、そのことを心配していた。少なくとも心配している口では言っていた。ふたりはそれについて時間をかけて話し合った。彼女と別の時間の使い方をするつもりだったエディはそんな話は避けたかったが、彼女が何度も蒸し返した。しつこく訊かれたのはたとえばジーニアス自身について具体的に何を話したのか、というようなことだ。

実のところ、ジーニアスの活動に関してはいくらか警察に伝えたエディだったが、ジーニアス本人については、ほとんど何も言えなかった。というのも、ジーニアスの正体を知っている人間など、まづいかなかったからだ。本名を知る者はいない。直接話ができるほど彼をよく知っている人間はごく限られている反面、彼の噂を知っている人間ならいくらかでもいた。ジーニアスは謎の男だった。これまでに一度も真つ当に働くことなく、税務署に嗅ぎつけられるような収入も資産も持たず、それでいて金が必要なときにはいつでも簡単に手に入る、そういう人間だ。ジーニアスは、いわゆる「フィクサー」なのだ。依頼を受ければ——そして報酬が見合えば——ほかでは入手できないようなものでも手配してみせた。空き部屋、瓶ビール、麻薬、禁輸品、売春婦——なんでもオーケーだ。シドニーにフィクサーを名乗る人間は大勢いるものの、依頼が通らないこともあった。が、ジーニアスにできないことはなかった。それが彼の呼び名の所以だ。ジーニアスなら、誰にも知られることなく邪魔な相手を死体に変えてくれるとまで噂されていた。見合うだけの報酬を払えばだが。

警察の耳にもジーニアスの名は届いていた。中でも、是が非でもジーニアスに会いたいと思っただけなのが、タイソン警部だ。そのためならと、エディの話に注意深く耳を傾けはしたが、すでに知っているか、疑っていた情報以上の話はほとんど得られなかった。ただ、新たに聞き出せたことが一つだけあった。運次第だが、ジーニアスが現れる可能性のある場所がわかったのだ。それを聞いたタイソン

ンは、エディがクエリータと会っている間にジーニアスを探しに出ていた。だが、その運には恵まれなかったようだ……。

エディはクロスから充分距離を空けてヴィクトリア・ストリートに出ると、ためらった末に大急ぎで道路を渡り、アール・ストリートに駆け込んだ。

キングス・クロスはシドニーの中でも海外からの移民の共同体が多い、自由な一画だ。その中心地、ちよどウイリアム・ストリートと合流する近辺は、日が暮れると周りの市街地とは対照的に照明と喧騒と人出にあふれるのだ。明るすぎる、とエディは思った。喧騒と人出も多すぎる。のんびりとしやべりながらベイズウォーター・ロードやダーリンハースト・ロードを行き来する群衆のどこかに、鋭い視線で自分を探している人間が紛れているかもしれない。

だが同時にこの地区は細い路地や裏道、狭い通路が網の目のように張りめぐらされており、エディはくねくねと道を曲がりながら先へ進んで行った。その迷路の中でも一番うらぶれているのがアール・ストリートだろう。不気味な道で、大通りの裏手にある。その短い通りは中ほどで左へ折れたかと思うと、裏道の様相を保ったままアール・プレイスに出る。だが、アール・プレイスは広々とした表通りのスプリングフィールド・アヴェニューに繋がり、そこに至る最後の数ヤードで驚くほど唐突に立派なファサードの建物へと景色が一変するのだ。

エディはスプリングフィールド・アヴェニューを横切りたくはなかったが、ほかにどうしようもなかった。適度に薄暗く建物が密集する袋小路から、ランケリー・プレイスなどともったいぶった名前の、ひときわ暗い裏道に入るためには、短い距離とは言えスプリング・アヴェニューを通らなければならないからだ。

エディは用心しながらアール・プレイスに近づいた。突然、心臓をわしづかみにされたように立ち止まる。明らかに悪意を持った足取りの人影が二つ、入口に現れたからだ。エディはあやうく踵を返して、再びヴィクトリア・ストリートへ逃げようとしたが、思い直して人影をよく見てみた。ふたりのうち、悠然と自信たつぷりに緩慢な歩き方で近づいて来るあの男——背の高い、痩せた体格——まぢがいなく、タイソン警部だ。

まぢがいなく、そこにいるのはタイソン警部だった。エサリτζ刑事も一緒だ。

「これはこれは」警部が優しく声をかけた。「エディ・スタツカーじゃないか。説教くさいことを言うように申し訳ないが、きみのように高潔で勤勉な人間が歩くにしちゃ、えらく遅いんじゃないか？」

「女と会ってたんだよ」エディが格好をつけて答えた。

「ほほう！」タイソンが優しい口調のまま小さく声を上げた。「春ともなれば、若者の空想は恋する物思いへと変わりたり」というわけか……この詩を書いたのが誰かわかるか、リチャード？」——とエサリτζ刑事に呼びかける——「きみの尊敬すべき先祖だったかな？」

「知りませんね」不愛想な若き相棒が、まともに取り合おうともせず小さく答えた。タイソンの親父め、気分が乗ってくるとやたらとしゃべる。

タイソンの親父はまたエディに顔を向けた。穏やかなままの声音から、不思議と優しさだけが消えていた。エディの耳には、その言葉は脅迫めいてすら響いた。

「やつはいなかったぞ、エディ」

エディはすぐに何のことかわかったらしく、うなずいた。「それ以上はおれも知らないんだ、警部。

ときどきあそこに来るらしいって、ギリシャ人のニツクが言つてただけで。でも、いつ来るかは誰にもわからないって」

「うむ……ギリシャ人には気をつけるよ、エディ、特に手土産を持つて来るギリシャ人にはな（トロイの伝説より転じて「敵に気を許すな」という意味のことわざ）」

「へ？？」

「われらふたり、つまりリチャードとわたしだが、今夜かのギリシャ紳士と言葉を相交じえる機会にあずかつた。つい先刻のことだ。きみの貝のごとき耳には奇妙に聞こえることだろうがね、坊や、彼はわれらの友など一度も目にしたことがないと言つた。それどころか、きみの話にまったく心当たりがないと、そう言うのだ」

「嘘をついてるんだよ！ おれはあいつから聞いたんだ——なあ、警部、こんな具合さ。ドアから出て行く男の後姿を見かけたおれが、ギリシャ人のニツクに（今のは誰だ？）って訊いたら、ニツクが——」

「落ち着け、落ち着け」タイソンの声に優しさが戻っていた。「きみの話を疑つてるわけじゃないんだ、エディ。嘘をついてるのは、きつとギリシャ人のほうだ。こちらが質問を始めたおとたん、急に英語がまったく通じなくなったから、そうとわかる。きみの言うとおりで、エディ……」タイソンが父親のようにエディの肩に手を置いた。「しっかり覚えておいてくれ。日記に書いておくといい。タイソン警部が、きみの言うとおりでと言つていたと。だが、わたしの話にはまだ続きがあるからな。それで——うむ——わたしたちの共通の友人について、ほかに何も話すことはないか？ 誰かから新しい情報を聞いていないのか、たとえば、クエリータ・トールレスから？」

「クエリータだって？」エディが金切り声を上げる。「どうして彼女の——？」

「だから、落ち着けと言ってるだろう、エディ。可愛いクエリータの魅力に夢中なのは承知している。そんなきみを責められる人間がどうか？ いや、誰もいまい」タイソン警部が思慮深そうに言った。「誰かの名言を言い換えるなら、美しい女性というものは神の最高のみわざだ。ただひよつとすると——」

「彼女は何も知らないんだよ、警部。あいつのことなんか聞いたこともないはずだ」

「じゃ、彼女には知らせてないのか？ きみが——」

「それは——いや——話した」

「そうじゃないかと思ったよ。恋というのはな、エディ、若者をやたらとおしゃべりにするものだから——何か言ったか、リチャード？」

「わたしですか？ 何も言いませんよ、警部」そう答えたエサリッジ刑事だったが、たしかに鼻で笑っていた。

「頼むよ、警部」エディが懇願する。「クエリータは巻き込まないでやってくれよ。彼女は何にも知らないんだ。何かわかったら知らせるから。本当だ」

タイソンはもう一度彼の肩を叩いた。「きみならそうしてくれるだろう」陽気な声で言う。「きつとそうしてくれるだろうとも。きみはいいやつだ、エディ、われわれはいいやつには親切なのだ。そういうわけで、きみは今、自宅のソファという隔離された安全地帯に向けて帰還する途上なのだろうか？ われわれが住まいまでお供しようじゃないか、途中できみの身が危険にさらされないように」

そういうわけで、残りの帰路は警察の護衛つきとなった。その夜だけは、エディの身は安全だった。